

ACHRAG における学術査読機能の制度設計について

分析実務と評価・判定を分離する仕組みとその考え方

発行：ACHRAG (AI Collaborative Historical Research Alliance Group)

分類：外部向け説明資料

問い合わせ：contact@achrag.org

1. はじめに

ACHRAG は、複数の専門解析チームが生成した学術的知見を、外部に公開する前に独立した立場から評価・検証する内部制度を設けています。本資料は、この学術査読機能がどのような設計思想に基づいて運用されているかを、外部の学術関係者・査読対象誌の皆様に説明することを目的としています。

ACHRAG における個々のチームの固有名称・内部構成の詳細は、運用上の理由から対外的に公開していません。本資料では、個別チーム名ではなく機能に基づく名称（「解析チーム」「学術査読チーム」等）を用いて説明します。

2. 分析実務と査読の分離

ACHRAG では、史料・文字体系・考古学的知見等を解析するチームと、その解析成果である論文

DRAFT（草稿）を評価するチームを、組織上明確に分離しています。解析を行ったチーム自身がその成果の学術的価値を判定することはありません。判定は、解析実務に一切関与しない別のチーム（学術査読チーム）が行います。

この分離の目的は、解析チームが自らの成果を過大評価する構造的な誘因を制度的に断つことにあります。学術査読チームは分析実務そのものを一切行わず、提出された論文 DRAFT の評価と判定のみを職務とします。

3. 独立性の担保

学術査読チームは、以下の点において解析実務チームから独立した地位に置かれています。

- 解析実務チームの指揮系統に属さない。
- 査読の判断基準（評価軸・スコアリング）は解析実務チームの意向によって左右されない
- 査読対象を選ぶのは学術査読チームではなく、あらかじめ定められた提出手続きに従う。

個々の案件について査読を行うか否かを恣意的に選択する権限は持たない。

この独立性は、査読という機能が「解析チームの延長」として形骸化することを防ぐための制度的な仕組みです。査読者が被査読者と同一の指揮下にある場合、評価の客観性が構造的に損なわれるリスクがあるためです。

4. 判定権限の限定 — 「評価」と「発行決定」の分離

学術査読チームが下す最も高い評価（ACCEPT）は、論文 DRAFT の公開・発行を意味しません。ACCEPTは「学術的に重大な欠陥が認められないため、最終決定権者への上申を推奨する」という意味にとどまります。

すなわち、学術査読チーム単独で対外発行を確定させる権限は制度上与えられていません。査読チームの職務は評価と上申までであり、最終的な発行の可否は ACHRAG の最終決定権者が別途判断します。この設計は、単一の内部機能に発行の全権限を集中させないための措置です。

同様に、対外発信を目的とする文書についても、査読チームによる学術的評価とは別に、機密情報の混入有無・表記規程への準拠等を確認する発行前監査の工程を経る必要があります。査読における高評価は、これらの工程を省略する根拠にはなりません。

5. 職務範囲の限定

学術査読チームの職務範囲は、あらかじめ定められた専門領域（歴史学・考古学分野の一部領域）に限定されています。この範囲を超える事案について、学術査読チームが単独で判断を下すことはありません。

状況	対応
担当領域外の論文 DRAFT が提出された場合	査読を引き受けず、判定を保留する（HOLD）
統計的手法・アルゴリズムの技術的妥当性が争点となる場合	その論点を切り分け、別の専門的検証プロセスに評価を委ねる
判断材料が不足している場合	断定的な判定を避け、追加の検証を経てから最終判断者に上申する

この限定は、専門外の事案について査読チームが無理に判定を下すことで生じる誤判定のリスクを避けるための設計です。

6. 評価の方法 — 数値スコアと具体的根拠

学術査読チームによる評価は、印象や感覚的な表現（「興味深い」「優れている」等）によってではなく、あらかじめ定められた評価軸に基づく数値スコアと具体的根拠によって行われます。

主な評価軸は以下のとおりです。

評価軸	内容
学術的妥当性	方法論は正当か。証拠から結論が論理的に導けるか
新規性	既存研究を超える発見があるか
証拠比例性	主張の強さと証拠の強さが釣り合っているか。過剰主張がないか
領域適合性	担当領域を逸脱していないか
掲載価値	どの学術誌・学会に値するか
矛盾検出	確立された定説と矛盾する箇所がないか。矛盾がある場合、根拠は示されているか

最終的な判定は、次の4区分のいずれかで示されます。

判定	意味
ACCEPT	重大な欠陥なし。最終決定権者への上申を推奨する
REVISE	特定の評価軸に修正が必要。修正の方向性を示し、解析実務チームへ差し戻す

REJECT 学術的価値が認められない、または担当領域外。廃棄を勧告する

HOLD 判定を保留する。追加の検証・外部専門知識が必要な場合

なお、学術査読チームは修正すべき論点と方向性を指摘するにとどまり、具体的な代替文案を作成することはありません。文章の修正は、当該論文を提出した解析実務チームの職務です。

7. 制度設計の背景にある考え方

本制度は、成果を生み出す機能と、その成果を評価する機能を同一の主体に委ねないという一般的な統治上の原則を参考に設計されています。この原則は、学界における査読制度はもちろん、公的機関における会計監査、報道機関における編集と広告の分離、司法制度における捜査と裁判の分離など、幅広い領域で採用されている考え方です。

とりわけ、評価を行う機能に一定の独立性を与えつつも、その評価機能自身が最終的な処分（本制度でいえば対外発行の確定）まで単独で完結させる権限は持たせず、別の主体による最終判断を必須とする設計は、権限の集中を避けるための一般的な制度設計手法として広く見られます。

ACHRAG の学術査読制度も、この考え方に沿って設計されています。

本 資 料 の 性 格 に つ い て

本資料は ACHRAG の内部制度の設計思想を一般に理解しやすい形で説明することを目的としたものであり、法制度そのものの解説や、特定の公的制度との厳密な対応関係を主張するものではありません。ACHRAG の査読制度はあくまで学術的成果物の内部評価を目的とした自主的な仕組みであり、法的権限や強制力を伴うものではありません。

8. お問い合わせ

本制度に関するご質問、または査読対象となった論文に関するお問い合わせは、下記の窓口まで

ご連絡ください。個別のチームへの直接のお問い合わせには対応しておりません。

お 問 い 合 わ せ 先 : contact@achrag.org

■ なお、技術的な疑問点・確認事項については、ACHRAG 公式サイト上での公開を優先する場合があります。

本資料は ACHRAG が作成した外部向け説明資料です。無断での転載・改変はご遠慮ください。内容は予告なく更新

される場合があります。